

清城 葵



Kiyoshiro Aoi

歩道橋の天使

Kiyoshiro Aoi

なぜ、どうして、なぜ、どうして……。

ご焼香の列に並んでいる私は頭の中で「なぜ」と「どうして」を繰り返す。返事はどこからも返っては来ない。涙が頬を流れた。ここにいたくない。貴方はこんな所にいない。私は逃げるようにその場を立ち去った、黒く縁取られた写真の中の貴方を置いて。

あてもなく歩いた。貴方を失った私には行く先などあるはずもなかった。夜の国道沿いを歩く私の横を何台もの車が乱暴に走り抜けていく。こんな時いつも車道側を歩いて私を守ってくれた貴方はもういない。一人ぼっちの私の目の前に歩道橋が現れた。

なぜだかこの歩道橋を上れば貴方に逢える気がした。貴方が待っていてくれる気がした。不安と期待を胸に一段ずつゆっくりと歩を進める。だが歩道橋の上には貴方はいなかった。ただ冬の強くて冷たい風だけが吹き抜けていった。

歩道橋の真ん中に佇んで、車のライトの流れを見つめていた。優しくかった貴方、大好きだった貴方。なぜ私を一人にして逝ってしまったの。歩道橋の下を走り行く車の煌きが貴方を連れ去る送り火に見えた。待って、置いていかないで、私も連れて行って。

ふと背後に気配を感じて振り向いた。そこには悲しげな表情で首を横に振る貴方がいた。ああ、貴方。やっぱりここにいたのね。待っていてくれたのね。駆け寄ろうと近づくと、空から柔らかい光が射してきた。貴方は微笑みを残して空に上っていく。腰が抜けたようにその場にへたり込んだ私は、子供のように大声をあげて泣いた。

あれからどれくらいの月日が過ぎただろう。この歩道橋に来るのはあの日以来だ。あの時と同じようにゆっくりと一段ずつ階段を上る。歩道橋の上にはやはり誰もいなかった。橋の真ん中まで歩いて空を見上げると、貴方の笑顔が見えた気がした。私ならもう大丈夫よ、貴方。でも私の事これからもそうして見守っていてね。

向こう側へ渡る私を、歩道橋の天使が優しい眼差しで見送っていた。